

## 植民地台湾における文字の文化と音声の文化

リテラシーの近代性を乗り越えたオラリティーの〈大衆〉

李承機

はじめに

およそ一九世紀半ばより、西欧の主な国々では一八世紀末から始まった産業革命を背景に、大量印刷技術の実用化と国民教育の実施とが活字メディアの普及を及ぼし、リテラシーとも称せられる文字の文化に大きな変貌をもたらしていった。識字率の上昇が読み書き能力を持つ人口の割合を上げるにつれて、活字メディアが急速な資本主義化・消費化を果たし、政治・経済的のみならず、社会・文化的においてもマス・メディアという近代的システムとしての機能を展開しはじめた。「マス」との言葉が意味しているように、大量の人々をつなげる一種の社会

システムとしての働きをもったメディアを大衆メディアとも称することができ、大量の人々がメディアによって均質的につながりあっている〈大衆〉というイメージも強くなっていった。

一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、マスという〈大衆〉のイメージや概念に関しては、多くの政治・社会的ないし文化的議論が行われていた。「文化」の概念史で有名となったイギリスの学者 Raymond Williams が指摘したように、マスとは大量の人々のことを意味している以上、どのような便利な公式を用いてこの「マス」という人間の群集を認識しているかは、「文化」という概念をめぐる議論が行われていた際に極めて重要なポイントとなっていた<sup>1)</sup>。こうして、リテラシーの大衆化

を遂げた西欧社会においては、同じような文字の文化によってつながった人間の群集が〈大衆〉として認識されていたのはもちろん、「大衆文学」との言葉が示しているように、〈大衆〉をイメージする社会・文化的基盤は読み書き能力をもとにしたリテラシーの人口にあったとも言える。

ただ、二〇世紀初頭以来、音声技術の実用化により録音技術にたよるレコードの流行、無線通信を応用したラジオ放送の出現、映画のトーキー化などの、オラリティーとも称せられる音声の文化がやはりはじめ、リテラシーの〈大衆〉のように、音声の文化も人々をつなげる〈大衆〉のイメージをなしてゆき、いわばオラリティーの〈大衆〉も現れてきたのであった。

明治維新以来西洋文明や近代化の道程を歩んできた日本でも、二〇世紀に入ろうとしたころより活字メディアの大衆化を達成し、リテラシーの〈大衆〉が姿を現していたが、一八九五年から日本の植民地統治下に置かれた台湾は、依然固有な社会状況を保ちつつ、近代教育やマス・メディアなどの「近代文明」の洗礼を受け、いわば「植民地近代」の時期に入っていた。本稿の目的はすなわち、西欧、日本など近代化の先進国とは異なった近代化のプロセスをたどった植民地台湾の、近代的な文字の文化と音声の文化それぞれの展開を考察することを通じて、リテラシーの〈大衆〉とオラリティーの〈大衆〉の区別を示す

ことである。また、今日の台湾社会の言語・文化状況に鑑みてリテラシーによる〈大衆〉を追究するよりも、オラリティーの〈大衆〉の可能性を示すことがより重要であると主張したい。

そもそも、一九八〇年代後半より植民地研究という分野が広がり、すでに蓄積されてきた政治・経済史のほか、社会・文化史という視角からもかなりの成果が挙げられている。ところが、〈大衆〉に関連するイシューはほとんどリテラシーの面で論じられており<sup>①</sup>、植民地台湾の音声文化についても、一九三〇年代初期からはやはりはじめた台湾語の「流行歌」が注目的となり、テキスト分析に基づいて知識人による文化の抵抗策として把握される傾向にある<sup>②</sup>。比較的音声文化の重要性を論じたものとしては、「台湾史研究の停滞あるいは文学的創作環境の複雑と険峻、時代の隙間に安定的に発展を得られたのは、在地の音声、すなわち流行歌語であった」、と研究者の陳培豊が指摘したぐらいである。陳はさらに植民地時期「文学解釈共同体」の成熟化を論証しながら、一九三〇年代から戦後にかけて台湾語流行歌の「可読性」と「歌を聴きて字を識す（聴歌識字）」の機能などを強調している<sup>③</sup>。ここでは、音声文化の重要性を提起したものの、流行歌を知識人の主観的な意識の産物として位置づける嫌いがあり、結果として「大衆文化」や「消費文化」などのイシューとしての「大衆性」「市場性」「親近

性」など資本主義的ロジックが無視されているようである。また、「大衆」とはいかなるものか、との問いに対しても、単に知識人のディスコースの繰り返しにすぎないと答えるしかなくなるようである。

そこで、本稿の方法論としては、まずは近代的技術が人間の認識論を変えた問題としてリテラシー技術とオラリティー技術とそれぞれの区別を重視すること。それに、外部のメディアにアクセスする感官として、人間の聴覚が五感の中で特別な認識論的な機能を有することも重視する。それによって、リテラシーとオラリティーとが人間の認識論の異なる次元に属しているものである以上、それぞれによってできた「大衆」のイメージとその姿も異なることを示す。

これらの作業により、植民地台湾の「大衆」は実は、リテラシーというよりもオラリティーの「大衆」が先にその姿を現していたことを論証したい。結論としては、植民地台湾において録音技術による強力なオラリティー文化装置が台湾人のリテラシーの不安定状態を克服ないし征服しつつあった中で、植民地台湾の「大衆」とは、オラリティーの「大衆」としてイメージされてきたのである。また、一つの仮説として、戦後にわたって「国語」の切り替えや「母語」というイデオロギーの興隆などを経てもリテラシーの不安定状態が続き、今日に至って台湾

人の認識論的な支配感覚はなおオラリティーの次元にとどまっている部分が大きく指摘したい。

## 一 文字の文化と近代的文字の技術

一九八〇年代初頭にリテラシーとオラリティーとを相対化させることを通じて、文字の文化と音声の文化との関係を再考した研究が W. Ong によってなされた。多くの鋭い指摘のうち注目すべきは、近代における行政文書、契約、領収書などの文字資料に対する重視、ならびに判決書の作成から生じた証言に対する扱い方の変化が専門職の書記や簿記を誕生させたということである。文字を操る技術が人間の主要な文化的手段を口頭から物質による記録へと変えて、いわば「記憶」の文化から「記録」の文化へとという転換がもたらされたのである<sup>5)</sup>。そのプロセスにしたがって、人間の認識論も変化していたのは言うまでもない。人間の五感という感官の区別で言うところ、認識論的な支配感覚が聴覚より視覚へとシフトしたことになる。

文字の技術と言えば、実は三千年以上の長い歴史をもっていた。そのため、いわゆる「近代」以降の文字の技術がなぜ文化的手段を変化させたかについては、活字印刷技術の発明や活字による大量メディアの出現から、政治、経済、社会的思想や

状況の変動にわたるまで、いろいろな「近代化」プロセスに  
関連しているはずである。メディア研究の先駆けであったM.  
McLuhanは、「五世紀半ばの活字印刷が近代的「活字人間」  
を作り出したとし、メディア技術の展開をも「感官拡張論」と  
して把握している<sup>66</sup>。そこから、レコードのような音声メディ  
アないし視聴覚を結合させるトーキー映画が現われる前に、文  
字技術の「近代化」とは視覚の文字を通じて人間の五感を擬似  
的な感覚で拡張させることと同様だったと考えてよからう。そ  
の場合に、文字技術がいかに運用されて文字の文化を形成させ  
るかは、文字を読み書くことに基づいたリテラシー能力に左右  
されることとなる。

西欧または日本の経験から見れば、一九世紀末期にすでに文  
字技術を用いて主に視覚による「感官拡張論」の境地に達して  
いた社会的背景は、すなわち識字率が百パーセントに近い程度  
まで及んでいたことにあった。活字印刷はあたかも「ナシヨナ  
リズムの建築家」であるとM. McLuhanが指摘し<sup>67</sup>、また「文  
盲」撲滅というスローガンや国民教育に対する「挙国」の熱心  
さなどに反映されていたように、明治期の日本では国民の識字  
率を上げることがナシヨナリズムの高揚と決して無関係ではな  
かった。したがって、近代的国民国家のもとで、文字技術の  
「近代化」がさらに追求されるようになり、リテラシーという

文字の文化も国民・国家的規模の文化的営為に結び付けられる  
ようになった。

再びW. Ongの言葉を借りるなら、本来音声の世界にしか生  
きていなかったことわざや格言の文字化とは、リテラシー能力  
を有するものが「口承伝統」の資料を文字テキストに切り替え  
ることであり、一九世紀初期以来民俗文化に対する近代的ロマ  
ン主義が英、米、独各国においてフォークロア（民話）の伝承  
と収集に力を注いだあげく、口頭によるオラリティーが逸失し  
ていき、最後は印刷技術の普及が作り上げた「公式テキスト」  
に取り替えられるようになったのである<sup>68</sup>。

W. Ongがリテラシーとオラリティーとを相対化させる背後  
には、もちろん「近代化」に対する検討やオラリティー世界の  
重要性を呼び起こそうという考え方が含まれている。それは、  
二〇世紀なかばまで言語や文学研究者は音韻を重視してきたも  
の、ほとんどがオラリティー（口頭言語、話し言葉）とリテ  
ラシー（文字言語、書き言葉）との相違を否認しており、「テ  
キストとして書かれたもの」を絶対視してきた、という指摘か  
らもわかりやすい<sup>69</sup>。ただここで注目したいのは、オラリティ  
ーによる表現はリテラシーとは無関係に存在できるのに対し、  
「文言」を書くことは、音声としての性格なしには不可能だ、  
ということである。つまり、リテラシーが人間の意識構造を変

えたこと、およびリテラシーの「近代化」に呑み込まれたり組み換えられたりしたオラリティーの重要性を強調したい。

「西欧やそれに少し遅れていた日本がリテラシーの「近代化」を遂げた一九世紀において、台湾はまだ清帝国の治下に置かれながら、推測では識字率が一〇パーセント以下にとどまっていた。漢字による活字印刷も無縁なものだったし、台湾島内での木版ないし石版印刷すら禁じられており、書物という印刷物も完全に輸入に頼っていた。リテラシー能力を有した知識人の大半は、科挙制度のもとで統治階級を目指して這い上がろうという官員の予備軍だったと言っても過言ではない。台湾で生活を営んでいた九割以上の人口は、リテラシーのない世界、つまりオラリティーのみの世界に身をおいていた。ただし、ほぼ一九世紀初期から二〇世紀半ばまで通じて、実はリテラシーとオラリティーの世界を巧妙に結び付ける機能を有した歌仔冊という印刷物が存在していた。

今日の研究者によれば、科挙に臨んだ「上層文人の伝統」である「文を以って道を載す」のに相對して、一八二〇年代の文献記録より見られた歌仔冊とは、「庶民百姓」を対象に漢字を利用して台湾語の文字化を実践してきたものとされている。その特徴としては、「用字を問わずにすべてが俗言で、……、ついに歴史上において未曾有な新文体を生み出したのである」。

しかも「音を表記するのを主とし、義を表す文字を補助とした文体は、母語で朗読され、かつ口から出て耳に入ることによって、はじめてその意が伝達されることとなり、また「音を読んで自然に義を得る」ことによりその伝達が「きわめて広がる」ものでもあり、そのため「歌仔冊を通じて読者の間では、音と義との連結が固定化した」、というのが杜建坊の見方である<sup>10)</sup>。

杜が注目した「新文体を生み出した」や「音と義との連結が固定化した」という歌仔冊の機能は、明らかに言文一致という近代的言語概念を視野に入れての解釈であろう。ところが、歌仔冊がいくら庶民的と言っても、一九世紀に識字率を上げる道具として利用されたということに関しては証拠が一切見あたらない。また、歌仔冊とはオラリティー重視の印刷物であった以上、逆に「口承伝統」の群集が発生した場のみにて成立しており、文字の操れないオラリティーの世界にとっては、あくまでもオラリティー上でしか意味がなかったと考えてよい<sup>11)</sup>。より正確に言えば、一九世紀から漢字が表音文字として操作される可能性もあったものの、歌仔冊の利用は、かえって台湾での近代的リテラシーの不在を示しており、さらにオラリティーという音声の文化がリテラシーのない世界でいかに重要であったかを明らかにしている。

それに、歌仔冊の存在は、リテラシーとオラリティーとの関係はさほど相対化させて認識すべものではないことも証明しており、オラリティとリテラシーの関係は、実は文字（ないし記号）と音声の内部との間に生まれるバイブレーションのようなリズムであろうと考えられる。だが、その後植民地時期に入ってから歌仔冊は重要視されることなく、近代的リテラシーと見なされたのは、すなわち台湾の近代的知識人が懂れていた、リテラシーの絶対化かつ安定化する、いわゆる言文一致のことであつた。

## 二 言文一致の幻想

一八八五年日本の自由民権派による「大同団結運動」が引き起こした「大阪事件」の公判関連新聞記事を追究しながら、事件のたつた一人の女性被告・景山英の法廷での供述の掲載で争つた各新聞の速記による「言文一致」はただの幻想にすぎない、という小森陽一の研究はとても明快である<sup>12</sup>。小森はポイントをリテラシーにそもそも「文言」と「口語」という「文体の二重構造」があつたことに置いているが、言文一致という概念が近代国民国家の「国語」イデオロギーの理想像でもあつたとしたら、言文一致をめぐる活字メディアの競争とは、文字の技術

を発達させた印刷資本主義とナショナルリズムのアイディアとが相乗して引き起こした現象であろう。

日本の植民地統治が始まった台湾でも、一九二〇年より新式の近代教育を受けた知識人が政治・社会運動を開始するにともない活字メディアを創刊したが、一九二一年末ころより台湾人の言語状況を問題視した議論がすぐ掲載され、およそ三年も経たずに文学的意義のある「新旧文学論争」や中国の「白話文」問題にもからんだ、言文一致に関してのイシューが浮上するようになった。一九三〇年代半ばまで、いかなる表記法か、どの言語を標準語にすべきか、などの議論と論争が一〇数年にわたって台湾発行の各活字メディアで繰り広げられたが、植民地時期においては案の定、決着がつくことはなかった。メディア使用者言語の重層構造という視点から見れば、台湾人社会を中心とした活字メディアでは、漢字をもって表記しながらも、漢文と中国式の「白話文」をはじめ、台湾語、日本語などが交じり合つた、同時期でも「台湾新民報体」と称せられたものが通用していた<sup>13</sup>。コミュニケーションという視角で言えば、もちろん台湾人知識人の間では、奇妙なと言つてもいいある種の「文体」がコミュニケーション機能を担っていた。しかし、こうした奇妙な「文体」は言うまでもなく、知識人のもつたナショナルスティックな思考、あるいは「近代化」「文明化」志向に背

いたものだと考えられていた。植民地時期において台湾人のリテラシーの不安定は近代化の未完成状態を示すものであり、また識字率が低いことが言文一致達成の障害であったという見解は、ほぼ植民地時期の知識人と今日の研究者とも共通している。

植民地時期の台湾人知識人は当たり前のように、日本語を習得してから言文一致という近代的な言語経験を味わいながら、それを真似して台湾でも言文一致の理想（または「言文一致の幻想」）を実現させようと懸命に取りくんできた。関連する論争の的もほとんど実現させる手段の問題に集中し、言文一致の概念それ自体を疑った発言を記した文献は現在見当たらない。ただ、これほど言文一致に強くこだわった理由も、植民地下という規定のほか、台湾それなりの条件が関係しており、それは言語ならびメディア状況から追究すべきと考えられる。

植民地時期から戦後にわたって文学作品を書きつづけた作家・鍾肇政の「脳訳」の例から見とおこう。鍾は、翻訳のプロセスを通じて台湾の言語状況の変化の中で自分の創作生涯を第一段階、第二段階へと全うした経験を下記のように語っている。

書こうとしたときに、どういう方法で自分の意思を表すかを先に頭に考えてしまいます。最初の方法は、日本語で書い

ていくことでした。……。まずは全文を日本語で書き上げてから、次に自分で中文に訳すことにしていました。これでもうやく自分の作品を完成させたのでありました。……。次の段階に入りますと、先に日本語で考えてみてから、頭で中文に切り替えて、そして直接に中文で書き下ろしました。だからこの段階になりますと、もう中文で書き上げることとなりました。私はこれを「脳訳」と言います。これは第二段階ですが、……。<sup>[4]</sup>

これは、戦後台湾が中国の「国語」であるマンダリンに出会ったからの経験談だが、引用文中の「中文」を前述した「台湾新民報体」に入れ替えれば、おおよそ植民地時期の知識人が文章を書いた際のプロセスに似ているだろう。しかも、漢字による台湾語の安定的な表記システムが公式に存在しなかった以上、日本語を用いないと、いくらリテラシー能力のある知識人でももっと複雑な「脳訳」をしなければならない状況にあったのであろう。だから、日本語教育を受けた知識人が言文一致の概念を全く疑わなかった背景には、日本語習得という自身の経験、ナショナルスティックな思考、加えて漢字による台湾語の表記システムが存在しないという言語状況等があったのである。簡単に言えば、一方では日本語の言文一致経験を持ちつつ、他方

では台湾語や中国「白話文」などを「脳訳」していた台湾人知識人は、言語状況の分裂的な境遇に陥っていると感じていたといえる。そのために、言文一致こそが台湾の言語状況を克服する唯一の手段であると信じ込んでいたのだった。

外山滋比古の近代読者論に照らしてみれば、台湾人知識人もった言文一致の理想は、植民地時期においては幻想という段階にすらほど遠いものだった。近代読者は自然に生まれたのではなく、言語教育を受けてから自主的な読書行為が発生してはじめてできたもので、近代的読書行為も、読者が作品を解読する難しさを体得した瞬間によりやく成立したものである、と外山が定義している<sup>15</sup>。植民地台湾の場合、書き手側のコード編成と読み側のコード解読はいっそう難しかったと想像できるのみならず、一九二〇〜四〇年代を通して識字率が約二割弱から三割強まで上がりつつあった台湾人社会では、リテラシー能力のない領域はあっさりと除外されることとなる。

整理してみれば、植民地台湾においての言文一致の幻想とは、二つの次元で発生していた。まず、政治力を持たない台湾人知識人にとって近代的教育システムを通じてリテラシーの統一化ないし安定化を図ろうとしていたが、それは不可能なことだった<sup>16</sup>。それに、国民国家的ナショナルリズムの風潮のもとで、台湾人知識人はリテラシー近代化の未完成に焦っていたあまりに、

リテラシーとオラリティーの不均衡の関係までは看破できなかった。

一方、まるで知識人へのいたずらのように、同じ時期に知識人に除外されたリテラシー能力のない領域は、前述した歌仔冊の流布ならび後述の歌仔戯の流行で、社会的にも文化的にもそれなりの音声の文化を展開してゆき、そして録音技術の実用化と消費化を通じて、そのオラリティーの独自の可能性を見せることとなったのである。

### 三 植民地台湾の「音響」環境

ここで言う「音響」環境とは、各種の音声に基づく文化装置が相響いて物理的にも精神的にも人間を囲む音声文化が織り成した環境のことである。つまり、前述した固有のオラリティー領域の外に、資本主義的なロジックを通した音声技術を使っての文化的営為も含まれる。メディア史研究者吉見俊哉がラジオ、レコードなどの音声技術を「『声』の資本主義」と定義しているが<sup>17</sup>、音声技術より広い範囲のオラリティー領域、たとえば演劇の場合も実は資本主義的・消費的意味をもつがために、植民地台湾の文脈においては無視すべきものではない。

遅くとも一八六〇年代台湾が清国の対外条約で開港されたこ

ろより、平野の多い台湾島西部ではすでに漢民族社会がかなりの規模を有していた。演劇ないし戯曲は漢民族固有の宗教の慣習の一部でもあれば、農閑期に当たっては庶民的な楽しみのも一種でもあった。植民地時期に入って一九〇〇年代初頭より、台北市内の演劇と映画の共用する混合劇場をはじめ、商業的に営まれる劇場が全島の普及していった。それに、都市生活や近代式の資本主義的なアイデアが広がるにつれて、一九三〇年代初頭までに台湾島内において「市制」を実施した都市部はもちろん、人口の二万人前後の地方町にもほとんど商業劇場ができていた。人口が集まった都市という空間が人間の群がる多様な場所を生み出すのであるから、劇場という場所とは、すなわち観客という群集をなすことを通じて音声の文化を経営する具体的な文化装置であったと言える。

劇場が都市の盛り場の核心となった影響で、周辺の娯楽産業（売店、レストラン、カフェー、ダンスや服装などの流行現象まで）も相まって現われ、それらに伴った文化現象は消費的な意味をもつ〈大衆〉の顕現と見なされやすくなる。実際、一九三〇年代初期に台湾人知識人の間で起きた「大衆文学」論争と「文芸大衆化」の文化運動とは、それまで流行した左翼思想に基づいての「階級論」が消費的な意味をもつ〈大衆〉とぶつかり合った結果でもあったと見ていい<sup>18</sup>。それゆえに、同時期に

流行現象を呼び起こした台湾語流行歌は台湾人〈大衆〉を台湾的な文化感覚に導く最適な道具だ、という知識人の意図が確かに強かった。識字率が低いと思われた台湾人〈大衆〉に対して、台湾語流行歌に「可読性」と「歌を聴きて字を識す」機能を託していたことも、確かにリテラシーの近代化を促そうという知識人の考え方を照らし出していた。ところが、台湾語流行歌が台湾語を用いて台湾人に親しまれやすい点はそれなりの文化的意義をもっていたとはいえ、一九三二年から一九三七年まで台湾語流行歌の「黄金期」が知識人の論述ならび行動によって展開されたという論理は、無理があると言わざるを得ない。

まずは、「歌を聴きて字を識す」という効果がかなり疑わしく、それはリテラシーとオラリティーとを相対化させたZORAの論理からも明白である。次に、オラリティーという音声の文化が独自に変化する可能性を有するばかりか、一九二〇年代末期「国産」蓄音機とレコード価格の下落など録音技術の実用化ならびに消費化にともなって、さらにリテラシーとの関係がより頻繁に変化する状態にあったことが指摘できる。また、台湾語流行歌が現われる前に技術化・機械化したオラリティーの環境は、すでにラジオ放送とレコード産業との共生／競合関係のもとで拡大しつつあり、それに関しての知識人の議論も実は台湾語流行歌の出現後のことであった<sup>19</sup>。そしてもっとも重

要なポイントは、一九二〇年代初期から大ブームとなった演劇の新形式・歌仔戲をより仔細に検討することからわかるのである。

歌仔戲の起源に関してはいくつかの説があるが、植民地期以前中国の本土から伝わってきた旧来の戯曲とは違い、植民地時期以降台湾島内に新しくできた演劇の種類だったことは間違いない。演劇の要素であるストーリーと音楽は旧来のものから転用、またはよりモダンなものと混用される部分が多いものの、内容的にも形式的にもかなり自由だし、上演する際に臨場のアドリブが多く、完全に台湾語を使用したり、庶民に親しまれるセンチシヨナルな中身からなる演劇だと同時代においても認識されていた<sup>20</sup>。ただここで注意すべきは、歌仔戲は劇場だけでなく実は室外で上演されるのが多いこと、そして旧来の宗教的場面だけでなく日常生活の娯楽としての役割も持つようになっていたことである。劇団の経営からすれば、各地を回っての巡演は言うまでもなく、一般の台湾人の趣味に合致する一種の資本主義的な営為であるとも考えてよい。それはつまり、歌仔戲がそれまでなかった全島的ないし全面的な大衆性を持っていたことを意味している。

ちょうど一九二〇年代半ばは台湾人知識人による近代式の政治・社会運動が展開してそのピークを迎えようとしたころであり、歌仔戲のもつ庶民性や親近性は、かえって知識人から「淫

乱」や「猥褻」であるというような批判を浴びていた。前述のように、近代化に対する焦りが高まるなか、台湾人知識人はできるだけ台湾社会を「文明化」の方向に引っ張ろうという近代化志向が強かったために、歌仔戲を貶したりしたのはごく自然なことであった。しかし、歌仔戲は一九三〇年代後半まで一貫して、それらの批判や軽蔑はどこ吹く風とはやりつづけ、戦後初期までを通じてもっとも歓迎される庶民の娯楽であったのである。

歌仔戲が流行歌より早い時期から録音技術によって広がり、しかも流行歌に勝るとも劣らない大衆性をもっていったことは、今日に残ったレコード史料でも確認できる。日本国立民族学博物館所蔵「外地録音資料」の約七〇八〇面分の内、「台湾録音」は約一九四〇面分。発行・発売年度が記録されかつ判別できるものは一九三三年以降に集中しているが、それ以前のものも少なくない。中身としては、歌仔戲、北管などの戯曲類がもっとも多く、ディスクグラフィーに明白に「流行歌」「流行新曲」「新小曲」などと記してあるものは、約五分の一しかない<sup>21</sup>。

要するに、知識人が流行歌を重視する理由はおそらくそのモダン風に代表される「文明化」の雰囲気にあったのだが、台湾人（大衆）にとっても確かなかなり「なじみ」の意義を有していた。ただし、時期、ジャンル、種類どの観点から見ても、流

行歌が現れる一九三二年以前に、台湾社会におけるオラリティーの重要性は、すでにレコードという音声の資本主義的論理を通じた歌仔戯によって物語られていた。このように、植民地台湾の「音響」環境は、物的な面における劇場、ラジオ放送、レコード産業などのハードウェアと、精神的な面における固有の音声文化、歌仔戯、輸入と本土と両方の流行歌などのソフトウェアが相まって織り成されたのだった。

#### 四 オラリティーの〈大衆〉

倉田喜弘はその著書『日本レコード文化史』において、日本の本土における一九二〇年代なかば以降の流行歌の流行現象を「大衆文化のプロローグ」としている。大衆雑誌と円本などのリテラシーの〈大衆〉と平行して、流行歌は「視覚の歌ごえ」という特色をも持っていたという<sup>22)</sup>。歌ごえが視覚性を有するとは、聴覚でも視覚的刺激を与えることができることを意味している。そこから、録音技術の実用により機械化された芸術としての歌ごえがオラリティーの〈大衆〉を引き起こしたと言えるが、オラリティーの「大衆性」とはいかなるものか、そしてリテラシーの〈大衆〉といかに区別するののかについて、五感という感官間の関係から追究できそうなヒントが出てくる。

M. McLuhan がかつて「文明はリテラシー能力に基づいて建てられたもの」と説きながら、視覚と聴覚とそれぞれに異なる文化の特徴を論じている。

……。リテラシーとは、時間、空間上においてアルファベットによって伸ばされた視覚を用いて、文化に対して画一的な処理を行うものである。ただ部落式の文化のなかでは、経験は聴覚的な官能の生活によって主宰かつアレンジされ、視覚の価値が抑圧されることとなる。中性的かつ冷静な目とは異なり、聴覚は高度な美感に満ちつつ繊細に多様性かつ包括性に富んでいる。オーラルの文化では行動と反応は同時に進行するものである。<sup>23)</sup>

端的に言えば、聴覚という感官は時間性かつ空間性を強く有し、リテラシーの画一性に比べて、オラリティーもより多様な可能性を擁しているものである。こう考えると、植民地下の「音響」環境においても、リテラシーの〈大衆〉がただのディスクールにすぎなかった理由も、リテラシー世界の台湾人知識人が歌仔戯の無造作や無秩序などを軽蔑していた理由もわかりやすい。また、オラリティー世界の台湾人〈大衆〉が聴覚の刺激を受けた瞬間に、その美感を満足させながら包括性を楽しんでい

たわけも見えてきただろう。

一方、M. McLuhanの「感官拡張論」は、メディア技術の進展は人間の感官の延長・拡張にあたるとしているほか、「新しいコミュニケーション媒体の出現・発達のなかでの五感の組み換えが、感覚麻痺や感覚閉鎖という事態に抗して、総合感覚としての触覚によってなされるべき」という論点も、哲学者である中村雄二郎の『共通感覚論』と通じている。中村はそれを敷衍しながら、近代以降の「視覚の優位」を検討することを通じて、五感の間での組み換えについてさらに詳しく論じている。

……、人間拡張としての技術手段あるいは媒体の引き起こす感覚の〈麻痺〉や〈閉鎖〉をこえて、五感を組み換え、諸感覚の新しい配分比率を発見することである。新しい技術の衝撃によって変化を蒙るのは、部分的ではなくて全体としての組織である。……、新しい衝撃が加えるごとに、感覚全体の配分比率が変化する。今日われわれが求めているのは、心理的、社会的な見地から感覚の配分比率の変化をいかに統御するかという方法である。あるいは、そのような変化をすべいかかに避けるかという方法である。<sup>24</sup>

つまり、M. McLuhanの「総合感覚としての触覚」を「感覚全

体の配分比率」で修正している。そして、その「心理的、社会的な見地から感覚の配分比率の変化」を統御する方法とはいかなるものかという点、今日では「常識」という意味でしか扱われない〈共通感覚（コモン・センス）〉を、古典哲学の意味に戻して「諸感覚（センス）に相わたって共通（コモン）で、しかもそれらを統合する感覚」のことだと捉えている。それはすなわち、「人間のいわゆる五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）に相わたりつつそれらを統合して働く総合的に全体的な感得力」のことなのである<sup>25</sup>。

活字印刷のリテラシーと音声メディアのオラリティーは、言うまでもなく、それぞれ異なった「感覚の配分比率」によって、それぞれの擬似的な「総合感覚」を作り上げることができる。そのうち、それぞれの〈共通感覚〉の働き方や仕組みも相違するはずなので、植民地台湾の場合に即してみると、二〜三割ぐらいのリテラシー人口も確かにリテラシーによる〈共通感覚〉を有していたが、台湾人社会全体は、実に別のオラリティーによる〈共通感覚〉の仕組みを共有していたのである。

ラジオやレコードなど音声メディアをめぐる資本主義的営為を「声」の資本主義」とした吉見俊哉も、「文字」のメディアと「声」のメディアの差異について、それぞれが帯びている社会性やその置かれた社会的文脈を捨象して一般的に語るべき

ではない」と説き、「五感の比率」そのものの社会性、歴史性を技術の変容と結びつけながら明らかにする必要性を強調した<sup>26)</sup>。植民地台湾においてはすなわち、一九二〇年代以来資本主義的に整備されつつあった「音響」環境により、視覚のリテラシーを征服した聴覚のオラリティー、またはリテラシーの近代化の未完成ないし不安定状態を乗り越えたオラリティーの興隆こそが、〈大衆〉のイメージないしその姿を描いていくことができたのである。そして、植民地台湾の社会的オラリティーの時間と台湾人の精神とが交差するリズムによってできた〈共通感覚〉が、オラリティーの〈大衆〉をつなげており、まさに M. McLuhan がいう「非リテラシー型社会」<sup>27)</sup>の状態で〈大衆〉が生まれたのであった。

### 結び…〈大衆〉の歴史社会学

マスというものは存在していない。ただ人々のことを『マス』としてとらえる方法しかないのである。……。実際、われわれは常にある種の常套的公式 (convenient formula) に基づいて人々を一つの群れとして解釈してきたのである。そのような条件のもとで、その公式が成り立つ。ゆえに、われわれが検討すべきものは、公式そのものであって、『マス』

というのではない。<sup>28)</sup>

引用したのは R. Williams の「文化」の概念史における指摘である。本稿は植民地台湾のリテラシーによる〈大衆〉を追究するよりも、オラリティーの〈大衆〉の可能性を示すことがより重要であると主張したが、R. Williams の指摘に照らしてみれば、実は〈大衆〉を解釈する「公式」を検討した作業にすぎないと認めざるを得ない。ただし、オラリティーの〈大衆〉の可能性を論じることによって、歴史社会学的な議論を呼び起こすこともできると思う。なぜなら、実体的にせよ想像的にせよ〈大衆〉が近代的資本主義社会に生まれた人々の群集として認識されてきた以上、異なる社会の間での文化状況を比較視角をもってそれぞれの「歴史性」ないし「社会性」を論じることができからである。

メディア研究者である J. Carey が、「マス」と「メディア」を再考した著作では、「マス」とは、人々の社会との同一化ないし社会の均質化を意味するものではなく、人々を結び付ける社会システム (すなわちメディアのこと) が技術によって変化しつつあることを意味する概念のことである、としている<sup>29)</sup>。それを敷衍してみると、〈大衆〉とは、似たような〈共通感覚〉の仕組みをもつ人々のことだとすれば、「大衆文化」とは、新

しい技術の実用化によって人々の〈共通感覚〉の仕組みを組み換える方法のことであると言える。植民地台湾の経験からすれば、オラリティー世界に関しては、近代的リテラシーによる〈共通感覚〉の働きの全面的な発生がまだ難渋・停滞していたなか、音声メディア技術の刷新ないしその社会的営為によって、オラリティーによる〈共通感覚〉の仕組みが一步先にできていたということは、オラリティーの〈大衆〉がリテラシーの不完全ないし不安定状態を征服したことを示していると考えられる。

また、戦後の問題として、台湾語流行歌を「郷土文学」として解釈することで、「郷土文学」という一九三〇年代の「台湾文学」の遺産およびその精神が戦後にも継承されていた<sup>20</sup>というような指摘もあるのだが、それはあくまでも知識人のリテラシーの側面にもとづいた認識だと言ってよいだろう。台湾語流行歌は単に植民地台湾の「音響」環境をなしていたソフトの一部であり、一九九〇年代によく定義された「台湾文学」の「精神」というのも、あまりにも構築論的な意味の強い、「公式」だからである。もし戦後にわたって台湾語流行歌がある種の「郷土的」な精神を有していたとすれば、実は形式的なものではなく、それは植民地台湾社会にすでに生まれていた、オラリティーの〈大衆〉に由来した〈共通感覚〉であったと考えられる。したがって、戦後再び「国語」の切り替え（日本語からマ

ンダリンへ）や「母語」（各エスニシティ・グループの言葉）というイデオロギーの興隆などを経た結果、リテラシーとオラリティーの関係が常に不安定な状態に保たれつづけ（たとえば「母語」の不在、クレオールと呼べるように呼べないようないわゆる「自然語」など）、さらに映像とオラリティーとの結合による今日の電子化した視聴覚メディア技術のもとで、「非リテラシー型社会」の残留としての台湾社会でのオラリティーの重要性がいっそう高まっており、台湾人〈大衆〉の〈共通感覚〉の仕組みはなおも聴覚というオラリティーに基づいた部分が大きいと言えよう。

かくして、植民地時期にオラリティーの〈大衆〉がリテラシーの〈大衆〉より一步先に「大衆文化」を体験した台湾社会は、明らかに日本や西欧社会とは異なる近代化経験を有しているのである。戦後の状況を合せて考えてみれば、旧来言文一致などのリテラシーの近代化論にとって台湾の近代化経験は異例だったと言っても過言ではないし、近代化論の深層に潜んだ直線的ないし段階的な論理に対する検討と反省も不可避であろう。未完の課題としてであるが、今後は異なる植民地での比較研究の可能性、また近代化経験の社会史、あるいはコロナアル・モダニティの歴史社会学による検討などの必要性も浮かんできるのである。

付記：本論文の作成に際し台湾の国家科学委員会研究プロジェクト  
「植民地台湾〈衆〉」の歴史社会学——社会認識の概念装置としての

〈民衆〉〈公衆〉〈群衆〉〈大衆〉(計画コード：NSC 98-2410-H-006-062-MY2)の補助を受け、その成果の一部に属している。

註

- (1) Raymond Williams, *Culture and Society: Coleridge to Orwell*, London: The Hogarth Press, 1993 (1st published 1958), p. 291-300.
- (2) たとえば、拙稿「一九三〇年代台湾における『読者大衆』の出現——新聞市場の競争化から考える植民地のモダニティ」(吳密察等主編『記憶する台湾——帝国との相剋』所収、東京：東大出版会、二〇〇五年)でも、およそ三割強の識字人口を「読者大衆」として捉えて、本稿の術語で言えば、リテラシーの世界がいかにオラリティーの世界に対して影響を持っていたかを論証した。しかし、台湾人社会のなかのオラリティー世界に文化の独自性およびその重要性などはすべて見落としていた。
- (3) たとえば、莊永明『台湾歌謡追想曲』、台北：前衛出版社、一九九九年。および楊克隆『台湾歌謡欣賞』、台北：新文京開發、二〇〇七年、など。
- (4) 陳培豐「郷土文學、歴史與歌謡：重層殖民統治下台湾文學詮釋共同體的建構」、『台湾史研究』第十八卷第四期所收、台北：中央研究院台湾史研究所、二〇一一年、一〇九—一六四頁。
- (5) W.J. Ong 著、桜井直文はか訳『声の文化と文字の文化』、東京：藤原書店、一九九一年(原著一九八二年、一九九—二〇二頁)。
- (6) Marshall McLuhan 著、森常治訳『グーテンベルクの銀河系：活字人間の形成』、東京：みすず書房、一九八六年(原著一九六二年)、および同著、鄭明萱譯『認識媒體：人的延伸』、台北：貓頭鷹出版社、二〇〇六年(原著一九六四年)、参照。
- (7) Marshall McLuhan 前掲『認識媒體』、二一〇頁。
- (8) W.J. Ong 前掲『声の文化と文字の文化』、四二—四三頁。
- (9) W.J. Ong 前掲『声の文化と文字の文化』、二六一—二七頁。
- (10) 杜建坊『歌仔冊起鼓：語言、文學與文化』、台北：台灣書房、二〇〇八年、九頁。
- (11) 拙稿「植民地體制與〈群衆〉——日治時期台灣人〈群衆〉的歴史社会学考察」、韓國東北亞歴史財團主催「再考察日本對韓國強制併合」國際學術會議、於韓國首爾商工會議廳、二〇一〇年八月(未公刊)。
- (12) 小森陽一『日本語の近代』、東京：岩波書店、二〇〇〇年、二一八—二二二頁。
- (13) 拙稿「植民地臺灣媒體使用語言的重層構造——近代性與『民族主義』的分裂」、若林正文、吳密察主編『跨界的台灣史研究——與東亞史的交錯』所収、台北：播種者出版社、二〇〇四年、参照。なお、『台灣新報』とは、一九二〇年に最初の台湾人資本によって創刊された月刊『台湾青年』の後継紙で、半月刊旬刊、週刊を経て、一九三二年に日刊化を果たし、植民地時期を通して「台湾人唯一の言論機関」「台湾人唯一の日刊新聞」などのシンボリックな存在だった。
- (14) 李育霖『翻譯闕境：主體、倫理、美學』、台北：書林出版、二〇〇九年、Ⅷ頁より引用。
- (15) 外山滋比古『近代読者論』、東京：みすず書房、二〇〇二年。

- (16) 拙稿、前掲「殖民地臺灣媒體使用語言的重層構造」。
- (17) 吉見俊哉『声』の資本主義・電話・ラジオ・蓄音機の社会史」、東京・講談社、一九九五
- (18) 拙稿、前掲「殖民地體制與「群衆」」。日本の本土においても似たような状況にあり、ラジオ放送が始まる前にレコード産業は必ずダメージを蒙ると予測されていたが、結局、互いに共生かつ競合の関係が生じ、かえって「音響」環境ならびその効果を拡大させるようになった。詳細は拙稿「ラジオ放送と植民地台湾の大衆文化」(貴志俊彦等編『戦争・ラジオ・記憶』所収、東京・勉誠出版、二〇〇六年三月)を参照。なお、台湾におけるラジオ放送の展開の大筋は、一九二七年に官設
- より始まり、一九三三年に公共化(台湾放送協会)、一九三四年に「内台中継」開始、一九三五年西部放送網完成、一九四二年台湾語「第二放送」開始、一九四四年全島放送網完成。時代の流れに従うと、基本的に官設から公共化へ、「文明進歩」から日常生活へ、娯楽性から宣伝動員重視へと変化していった。
- (20) この点については本紀要同号に掲載された石婉舜論文を参照。
- (21) 福岡正太編集『植民地主義と録音産業』日本コロンビア外地録音資料研究、大阪：国立民族学博物館文化資源研究センター、二〇〇七年(平成一七—一八年度科学研究費補助金研究成果報告書)。
- (22) 倉田喜弘『日本レコード文化史』、東京：東京書籍、一九九二年、一五四—一五八頁。
- (23) Marshall McLuhan 前掲『認識媒體』一二一—一二三頁。
- (24) 中村雄二郎『共通感覚論』、東京：岩波書店、二〇〇〇年、六四—六六頁。
- (25) 中村雄二郎、前掲『共通感覚論』、七頁。
- (26) 吉見俊哉、前掲『声』の資本主義、二七八頁。
- (27) Marshall McLuhan 前掲『認識媒體』一二四—一二三頁、参照。
- (28) Raymond Williams, *Culture and Society*, op. cit., p. 300.
- (29) James W. Carey, *Communication as Culture: Essays on Media and Society*, New York: Routledge, 1989, Chapter 3: Receiving "Mass" and "Media", P. 69-88.
- (30) 陳培豐、前掲「郷土文學、歴史與歌謠」。